
あの頃には戻れない

Spis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃には戻れない

【Nコード】

N5139M

【作者名】

Spis

【あらすじ】

愛する人が突然に死んだ。

『桐乃 綾』は幼馴染みである『緒方 春哉』に恋をしていたが、自他共に認める奥手な性格から告白する勇気がなかった。変わらないうちと思っていた関係、隣でずっと見守り続けてくれると思っていた彼は、突然交通事故で死んでしまう。それも自分の目の前、腕の中で。

悲しみに暮れ自暴自棄になっていたある日、綾は謎の少女から一つ

の携帯電話を授かる。

「あなたは全てを擲つてでもその恋を取り戻す覚悟はある？」

それは　過去を、未来をも変える不思議な携帯電話だった……。

初恋を追い求める少女と、生きる意味を問い続ける少年、そして二人を取り巻く少年少女たちの恋物語。

プロローグ

恋は限りない方法で私たちを喜ばせる。ただし、私たちから平安を奪い去るということのをのぞけば。

ジョン・ドライデン

あなたは、誰かを愛したことはありますか？
猛烈に、ただどうしようもない衝動、恋を感じたことはありますか？

心の底から愛する人のために、自分の全てを擲ってでも欲したことはありますか？

その恋のために、他人の人生ですらもその牙にかけても厭わないと考えたことはありますか？

ある日 私は気づいた。

自分の心の奥底に眠る、いや、眠り燻っていた感情が浮き上がってくるのを。

それは、まさしく恋。

朝起きて一番初めに思い浮かぶ人の顔は親ではなく彼。

登校している最中に不意に探してしまう姿は彼。

授業中、黒板よりも集中して見つめてしまうのは彼の背。

体育の授業、特に目立ってもいないシーンでも輝いて見えてしまうのは彼の姿だけ。

「好き」

その一言を伝えられない相手はただ一人、彼だけ。他は友情での好き、家族として好き、私に関わる人々に、ほんの少し勇気を出せば言える親しみを表す言葉のはずなのに。

それは、言ってしまうえば何かが壊れる気がしてしまう魔法の言葉。私は不器用だし、奥手だし、とても引っ込み思案。

だから、きつと、この恋が実らなかったら元の関係には戻れない。ずっと長い間、私は彼を見続けてきた。親友、幼馴染みとしての彼の距離を優待されてきた。

その関係が、その一言で全て失ってしまうかもしれない。臆病な私には、決して言うことのできない言葉だった。

でも 私は今、言えなかったことを死ぬほど後悔している。言うべきだった。

言わなければならなかった。

どんなに辛い思いをしたとしても、言うべきだった。

たとえ実らない恋だったとしても、彼を完全に失うわけではないのだから。

でももう遅い。

全ては過ぎてしまったことだ。

私の犯した過ちは、この後の人生ずっと背負っていかなくてはならない。

どれだけ長い時間苦しまなくてはならないのだろう。

あの日。

彼は私の腕の中で息を引き取った。

私にとって二度と忘れられない日になることは、間違いない。

人生最悪の出来事だった。

プロローグ（後書き）

自身2作目となる本作ですが、今回は恋愛を全面に押し出した作品になると思います。

私の作風であるシリアスは抜けきらないとは思いますが、なるべく軽く、そして甘い恋愛模様を描けたらいいなと思っております。

更新はいつものごとく遅くなると思いますが、よろしければ最後までお付き合い下さいませ。よろしくお願いします。

第一話 私たちが壊れるまで（上）

サアーと心地良くそよぐ風に、私は身を任せていた。

風は、私の腰までかかる長い黒髪をなびかせ、制服のリボンを忙しなく踊らせる。まるで犬の尻尾のようにぱたぱたと動きまわるリボンを左手で抑え、そのまま胸に添えた。

左手から感じる微かな振動。私が生きている証。けれどその鼓動は、生きるだけにしては早過ぎる。私の鼓動もまた、踊っているのだ。

「遅いな……」

私の瞳はただ一点だけを見つめ、決して動こうとはしない。自分の意思が介在していないのか、むしろ生理的行為をも受け付けないのか、瞬きすらも躊躇っているように思えるくらいだ。

私が見つめる先には、古びた石造りの数えて48段の階段。所々が老朽化でコンクリートが崩れ、ただでさえ急で足場の少ない一段一段を更に歩みにくくしている。真ん中を通る二本の鉄手すりは、最早素手では触りたくないほど汚らしく錆びこけていた。

その階段は、本当の意味で私の一日が始まる場所。私の視界にたった一つの影が現れるだけで、世界は激変するのだ。

華やかな世界に導くその影は、いつもきつちり予定の時間に現れる。けれど、その予定の時間まで待ちきれない私は、「遅いな」と呟くことが常だ。

48段の階段のてっぺんをひたすらに見つめ溜息をつく。私は自分の目が痛くなってきたことに呆れたのだ。まったく、自分勝手極まりないと思いつつもため息が漏れてしまうのは仕方がない。

目が痛くなってしまうのも当たり前だ。48段目のちょうど真上には、この世界の生命とも呼べる存在がその姿を惜しげもなく示し

ているからだ。そう、太陽。

西を向いて傾斜しているこの階段は、その頂にちょうど太陽が乗るような形で私に朝を知らせてくれる。おかげでこの階段を常に見続けることは困難極まりない。けれど、目を離すわけにもいかない。毎朝自分の目を虐める難儀な日課から始まるのだ。

瞬間、その光が遮られる。

その人は私にとって世界の生命とも呼べる存在。太陽ではない。

太陽は最早彼を輝かせるためのオプシオンでしかない。

太陽の光を遮るその人は、私の体をすっぽりと覆い尽くすほど大きな影を作る。

私の目は太陽光の焼き付きでその姿を明確に捉えることができない。それが本当に悔やまれた。けれど、おぼろげに見える光を背にしたその姿は、まるで太陽すらも手中に収めた太陽神のような神々しさを放っていた。

「おはよ。今日も早いな」

その人は、柔らかく温かい声音で私に呼びかけてくれる。それがとても嬉しかった。この声を朝一に聞くことが私の生きがいである。やがて駆け足で急な階段を駆け下りてくるその人の姿を、回復しつつある視界でひたすらに追った。学校指定の革靴を肩にかけ、慣れたように軽いステップで最後の段、いや、最後の数段を飛び降りた彼、『緒方 春哉』 ハルくんが私の横に並んだ。

邪魔にならない程度に伸ばされピョンと跳ねたくせ毛の黒髪、そこに収まる幼さを残しつつも、どこか大人びた印象すらも受ける顔は、私にとってまさに芸術。真っ黒で少し小さめの瞳は、優しさと言意志の強さを伺わせる。一見、スラリと痩せた印象を持たせる体格だが、以前上裸の彼を見たときはその筋肉の凄さに驚いた。

とまあ、えらく私は彼を褒めているが、実際のところ容姿だけで言えば一般的な少年である。

「うん、おはよう」

いつも私はそれ以上何を言っていないかわからず、言葉少なに答えるだけになってしまふ。それでも彼は特に気にしたような顔はしない。ただにつこりと笑顔で返してくれるだけだ。

「今日って体育あったっけ？」

ハルくんは私が肩に下げている体操着袋を見てそう言った。

「ううん、明日だけど……私忘れちゃうかもしれないから」

「ああ、そっか。俺もそうすりゃよかったかなあ」

「ハルくんはきつと忘れないよ」

私がそう言うと、彼は満面の笑みで「そっか」と答えてくれた。

彼は与えられた評価に絶対謙遜しない。彼曰く、「褒めてくれた人に悪い」だそうだ。

褒め言葉にありがとで返す、ごく当たり前に見えてみんなその一線を超えられない。少しでも返しを誤れば自分に酔っていると思われるかもしれない。そう思っているのは私だけだろうか。

私たちは階段の反対方向に向かって歩き出す。するとまたすぐに階段が現れるのだ。今度は59段。ハルくんがいつも降りてくる階段よりも11段多い。けれどこっちの階段は比較的最近作られたもので、まだ多少コンクリートの白さを残しているし、手すりもメッキがされているのか全く錆びていない。

夕方になるとこの階段は夕日をその頂に乗せ、朝日とはまた別の絶景を生む。

この街はこのような階段がいくつも存在する傾斜街として有名だった。そのあまりの傾斜の多さと街の近代化、はたまた新興住宅地

や規模の大きなビルなどの誘致の影響もあり、老人たちは決まってこの街を嫌い遠のいて行き、たちまち若者が集まり横行する『今時の街』となった。

一時はシャッター通りなどと揶揄され、人足の遠のいていた商店街も今では若者をターゲットにしたショッピングモールとなり賑わいをみせている。私たちはその真新しいショッピングモールのゲートをくぐる。帰りは道草に丁度いい場所だが、行きは時間の関係でどこもシャッターが降りているため閑散としている。

ショッピングモールを通りすぎると見えてくるのは片側2車線の国道線。その上をまたがるようにかかる歩道橋を私たちは登っていく。

そこから見える春の景色は、今でも息を呑む。

200m程も続く、二本の桜並木の直線に挟まれた遊歩道。一本一本が洗礼され、まるでそこに収まるべくして生い茂っているかのように幻想的な桜道だ。

それは私たちの通う高等学校、『市立柊ヶ丘高等学校』の関係者しか通ることの許されない花道。まるで大学のキャンパスを思わせるその堂々たる門構えに憧れて入学を希望する生徒も少なくない。

私も、ハルくんもその一人だ。

もちろんその堂々たる門構えに相応しい学力レベルを要求される、市内で最もレベルの高い高校として名が通っている名門校でもあるハルくんは兎も角、私にとって必死で勉強してやっとつかんだ椅子だったわけだが、2年経った今でも壮絶な椅子取り合戦に勝利したのは奇跡だったのではないかと疑うほどだ。

それだけに胸をはって登校できるし、隣にこんなにカッコいい幼馴染みがいるだなんて私は幸せものだなと毎日思う。……カッコよく映っているのは私の目だけなのかもしれないが。

「今日もすっごい景色だな」

「見頃は今週末までだって言ってたよ」

「へえ。じゃあ散らないうち……うーんと、土曜日でも花見に行くか！」

「ホント？ 二人で？」

私がいまにも『二人』ということ強調しすぎたのか、少しだけ頭をかしげたハルくんだったが、何か思い立ったように首を縦に振って眼下に広がる桜を眺めつつ答えた。

「いいよ、二人きりでいい」

私が隣で歓喜している間も、彼は桜から目を話すことはなかった。桜から目を離さないのではない、恥ずかしくて私から顔を背けているのではないか。そんな予感が私を更に浮き足立たせる。

だって、ハルくんが二人きりを許すのは登下校の時だけなんだから。

きつと、きつと、今回の花見は何かがある。

私たちの関係に進展があるかもしれない。多分、私の方からどうこうすることはできないと思う。いつもの如く声が喉に詰まって何も言えなくなつて終わりだ。そんなこと重々承知している。

でも今回ばかりはハルくんの方から何かあるのではないかと期待するには十分な反応だったと言う事だ。

と、何度とそういう想像をして裏切られたことだろうか。

けれど期待せずにはいられないのが乙女心というものだ。

教室まで私たちは他愛もない話に花が咲いた。基本的に上がり症で口数の少ない私だが、話し上手聞き上手のハルくんの前ではそんな私のウィークポイントも意味を成さない。常に絶える事のない話題と共通の興味が私を饒舌にさせる。もちろんハルくん以外ではそんなことあるわけがない。親しい女友達や、家族くらいしか長い間話すことが出来ない。

「ちーっす！」

私たちに親しい挨拶をしてきた少年、『飯田 淳平』 ジュンくんは、私たちの親友であり幼馴染みの一人。

常に明るくハルくんと同じく気さくな性格で、何よりその容姿の良さも相まって女子たちからの評判は良い。まるで繊細な金系のように美しい金髪は染め上げたそれとはわけが違う。名前だけで判断するとバリバリ日本人のような印象を持たせるが、彼はイギリス人の親を持つハーフだ。外人らしさを残す整った顔立ちとスマートかつ無駄のない身体、嫌味のない性格は女子を虜にするには十分すぎる。もちろん、私論ではなく一般論。私にしてみれば、ハルくんに勝るものなどいないのだから。

「ちっす。なあなあ！ 昨日のドタチャンみたか！？」

「ああ、あれは面白かったな。基本ギャグは興味ないんだけど、ハルのメールで見始めたらぶっ通しさ」

二人はやたら楽しそうに昨日の10時に放送されていたお笑い番組の話で盛り上がり始めた。当然私もハルくんから「面白い番組やつてるから見てみるよ！」とのメールが来て、毎週見ているお気に入りのドラマをほったらかして食い入るように見入った。もちろん、面白いただけではドラマを捨てたりはしない。ハルくんととの共通の話題を持つためのほうが比重は大きかったからこそだ。

おかげで登校中のこの話題にはすべてついていけたし、何より楽しい会話が出来た。それだけで、もうお気に入りのドラマのことなどどうでもよくなっていた。

「みんなっ、おはよー！ 何、何の話？」

甲高い元気な女の子の声、その声もどこか親しみがある。彼女、

『河野 由紀子』 ユキも、もちろん私たちの親友であり、幼馴染みだ。ハルくんとの付き合いは私のほうが早い、彼女も付き合いは長い。

真っ黒でつやつやのロングヘアを後頭部で束ね、馬の尻尾のように垂らしている。いわゆるポニーテールだ。その美しいなめらかな髪を束ねる、可愛らしい猫のマスコットが取り付けられた赤いリボンのシュシュは私たちお気に入り小物店の掘り出し物。私とは正反対の快活な性格で、ズバズバと物を言う我が道を行く少女だ。けれど、我侭というわけではなく一歩手前で踏みとどまることの出来るどうにも憎めない可愛らしさをもつ女の子だった。

私はそんなユキに憧れていた。少しでも私にユキの勇気があれば、もしかしたら私もユキのように。そこで私は思考を振り払った。

「昨日のドタチャンの話、ユキも見たる？」

「見た見た！ やばかったよねえあれ！ 特にヨツシがさあ」

「そうそう！」

楽しそうに会話する私たち4人は、全員小学校のころからの幼馴染み。喧嘩ひとつしたことのない、仲良し4人組として私たちは高校に来てもしばかり有名人だった。常に4人で行動する私たちは、特定の距離を置きたがる微妙な年頃の高校生にしてみれば異色の存在だったのかもしれない。けれど私たちはそれを意識したことがない。

巡る季節、繰り返される毎日、私たちは4人、ただの一人も欠かさず笑いあっていた。

そんな関係が、ずっと続くと思ってやまなかった高校2年の春それは少しだけ変わりつつあった。

男と女。距離の近すぎる4人が互いを意識しないはずがなかったのだ。少なくとも4人の中の3人は恋という病を知った。残る一人、ハルくんを除いて。

有り余る魅力を持つジュンくんを女子たちが見逃すはずはないし、また、女子の私が見ても可愛いと思うユキだって健全な男子ならば放ってはおかないだろう。でもどうして二人はそのような色沙汰に巻き込まれないか。それは簡単な理由だ。

『二人は今年の春から付き合い始めた』のだ。

私はその事実には驚きを隠せなかった。付き合い始めたときユキから聞いたときは丸々1分思考が停止したくらいだ。私が驚いたのは何もまさか幼馴染みからカップルが出来たということではない。むしろ私は『ユキがジュンと付き合った』という事に驚愕したのだ。私はてっきり、ユキはハルくんのことが好きなものとばかり思っていた。それはそうだ、常に一緒に居たがったのはジュンくんではなくてハルくんのほうだったし、いつもユキが甘えるのはハルくんだったから。

二人が付き合い始めたことを私とハルくんは祝福したが、どうにも私は腑に落ちなかった。祝福されるジュンはとても満足そうで、嬉し恥ずかしそうに笑っていたが、ユキの笑顔にそれはなかったと感じてならなかった。もちろん、ユキとハルくんが付き合い合うことになってしまうよりは100倍マシだったけれど。

そういうわけで、数年間続いた4人で登下校するという暗黙の約束は、1ヶ月前に音もなく静かに消え去った。

二人が離れがちになった微妙な空気の中でも、ハルくんは常に私たちを気遣うように立ち振る舞い、そのリーダーシップを遺憾なく発揮してくれていたおかげで、とりあえず目に見えてギクシャクすることはなかった。当然、突然4人で登下校をやめた私たちを訝しむ生徒たちや、どうしたのかと心配してくれる心優しい友人たちもいたが、ハルくんは包み隠さず彼らに事情を話した。

釈然としない私をよそに、どうやら二人はうまく行っているようで、たまにデートの話になったりすることもある。普通ならあまり雰囲気よくなる話とはいえないが、そこは私たちの長年の付き合い合いがカバーしてくれたし、時々入るハルくんのフォローが、そんな

話題も私たちを楽しませてくれた。

今のところ、何の問題もなく私たちは変わりつつある日常に慣れ始めてきていた。

でもそれは、私たちが幼馴染みだったからという理由ではない。影で私たち3人を支えるハルくんの存在があつてこそその平安であつたことは言うまでもない。

昔から私たち4人は対等な関係であつたが、中でもハルくんの発言や行動には誰一人として逆らうものはいなかった。もちろん、嫌だと思えば私を除いた2人はその気持ちを押さえ込まず正直に言つただろう。私は、ハルくんにならどんな命令でも背く事はなかつたろうが……。

兎に角、ハルくんは仲良し幼馴染み4人組のリーダーとして暗に認められていた。決して成績が良いと言う訳ではない彼だが、生活においての瞬時の判断や行動力は現代の孔明と私たちが評すだけの能力を持っている。

ハルくんは成績も特に優れているわけでもないし、運動神経も平均より少し高めというだけで大したことはない。容姿だつてジヨン君に比べれば平凡だ。けれど、その優しさと気さくさは群を抜いているし、人を纏め上げるリーダー能力もずば抜けて高い。嫌味なくさりげなく他人を気遣える彼のその人間性を好む人は少なくなかつた。

しかしながら、人間性を重視する人間は押しが弱いと私はにらんでいる。彼と距離を縮めるにはそれなりの時間が必要だし、何より誰にでも隔てなく優しさを振りまく彼の心が自分に偏っているとうやつたら認めることが出来ようか。それはまったく難しいことだ。それは自信を持って私が証明する。8年の付き合いだが、未だにその境界が垣間見えない。

そんなこんなで、ハルくんの浮ついた話はとりあえず聞いたことがない。もしかしたら裏で告白とかもされたのかもしれないけれど、今のところ付き合つてるような素振りもない。一番危ないと思つて

いたユキはジュンくと付き合い始めた。きっとこれから、早々簡単にハルくんがとられるようなことはない、と私は高をくくっていた。

私は　そんな根拠もない理由と、振り絞れない勇気に目を背け、ハルくんに想いを告げることを渋っていたのだ。

第一話 私たちが壊れるまで（上）（後書き）

意外と早く更新できました……ということは誤字脱字等も多いでしょうが（笑）

見つけたら報告願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5139m/>

あの頃には戻れない

2010年10月8日14時14分発行